宗教とは 分かりやすく説く

「梅原猛の授業　仏教」

梅原　猛著

――宗教なんてものは、それぞれ自分のなかにあればいいんで、定義する必要はないと思うんです。

――宗教は自分たちの生き方を表しているものですけど、自分の宗教と違う宗教の人たちを消していこうということで国と国とが戦っているじゃないですか。

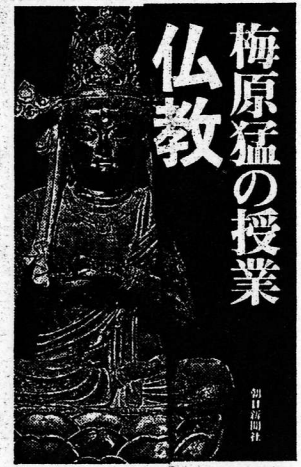
――宗教戦争といっても、キリストさんが戦争しろとはまったく望んでないんじゃないですか。信者の人らはその意志継がなあかん。

驚くなかれ、これは『人生に宗教は必要か』というテーマで、授業中、中学生同士が討論した発言の一部だ。本書は、著者が京都洛南中学をかり、宗教の授業を十二時限にわたって行い、その講義記録に加筆したものである。

今、なぜ宗教なのか。かつて戦前、日本にも『修身』があり、天皇陛下に忠義をつくし、親に孝行せよという、人にしばられた他律的な道徳が存在した。だが、マッカーサー指令により、その教育は消え、かわりに自律的道徳が教えられるはずが、それがまったくなかったと著者は嘆く。戦後こそ、個々国々の争いの原因を究明し、歴史的に蓄積された愛欲や憎悪といった対立の源を断ち、他人の信じる神や仏も大切にする多様性が求められた時代はなかったというのに。そこで、自らの内なる力で自分自身を律する道徳教育の根幹にくるのは宗教、なかんずく仏教の四諦十二因縁、寛容と慈悲の徳が重要ということになる。

文部科学省が提唱する奉仕活動にも、奉仕より座禅や托鉢の修行をやり、忍辱（自己意志で厳しい環境に入り、人からの侮辱や軽蔑にすすんで耐える力をさし、忍耐とはちがう）の徳を養ったほうがいいと述べる。（ちなみに奉仕は、本来、キリスト教の道徳である）

いずれにせよ、これが授業という形態の中で、難解な語をできるだけ排し、仏教をわかりやすく説いた稀有の一冊であることはまちがいない。七十六歳の著者が、次世代に伝えようという意気込みが感じられる。カバー写真の菩薩座像の慈愛に満ちた姿も印象的である。評・宮本誠一（小規模作業所「夢屋」代表）



朝日新聞社1300円